

## 調査報告 9

# ソウル市卸売市場実態調査報告

中村学園大学 流通科学部

講師 徐 涛

### 1. はじめに

本稿は、中村学園大学流通科学研究所の2009年度共同研究調査の報告である。本報告をまとめるにあたり、韓国ソウル市の（社）韓国農水産物卸売市場法人協会、可楽洞（カラクドン）市場及び市場内の卸売業者2社、ソウル青果、韓国青果を訪問した。ここで、同協会部長の呉世福氏、ソウル青果常務理事の朴鐘玉氏、韓国青果の野菜本部統括次長 Oh Sa Moon 氏の説明を受け、その後実態調査及びヒアリングを行った。なお、これらの説明の補足として一部の資料・データは韓国の農産物流通に関する先行研究から引用・参考にしたものを添付している。

### 2. 可楽洞市場の概要

ソウル市内には現在、可楽洞と江西の2大卸売市場がある。韓国全土には32ヶ所の公営卸売市場があるが、この中で最大規模を誇るのが可楽洞市場である。同市場の取扱は近年減少傾向にあるが、全国の卸売市場に流通する農産物の30%以上に達している。可楽洞市場の正式名称は可楽洞農水産物総合卸売市場である。同市場は、韓国最大規模の卸売総合市場で、通称「可楽市場」（カラクシジャン）と呼ばれる（以下、「可楽洞市場」という。）現在でも、可楽洞市場の開設は韓国の農産物流通史上で最も重要かつ画期的な出来事であると言われている<sup>1</sup>。なお、同市場の開設までの略史は以下の通りである。1977年8月、韓国農林部は後進的な農水産物施設の近代化と流通体系の構造改正のため、農水産物流通センター建設方針を決定し、1980年4月に可楽洞の農水産物総合卸売市場の建設計画を

策定した。1982年4月にソウル国際復興開発銀行借款の4,950万ドル、国費348億ウォン、市費142億ウォン、総合出資133億ウォンなど、総額933億ウォン（1984年基準）の工事費を使って建設工事を着工した。1984年4月には卸売市場管理公社を設立し、1985年6月に可楽市場（青果、水産）を、1986年6月には畜産市場を開場し、市場全体が竣工になったのは1987年末のことである。

可楽洞市場はソウル市の東南部の極めて交通の便のよい場所に開設されている。敷地面積は54万2,920m<sup>2</sup>、建築面積26万1,787m<sup>2</sup>、建物数47棟である。1日の平均取扱高は7,497トン、取扱金額80億ウォン、利用人員13万人、出入車両4万4千台にまで及ぶ。1日の平均取扱高の内訳は、青果88%、水産8%、畜産4%であり、平均の取扱金額では、青果70%、畜産15%、水産15%となっている。<sup>2</sup> 同市場の面積規模は、東京都中央卸売市場（19カ所の市場合計）と比較すると、敷地で22.3%、建物で93.4%を上回り、アジア最大の近代的農水産物卸売市場となっている。同市場は青果、畜産、水産と分かれているが、その中においても細かく売場が分類されている。これについては、青果市場、野菜市場、乾燥唐辛子市場、にんにく市場、水産市場、乾魚物競売市場、畜産市場、直売市場、青果関連市場、乾魚物関連市場となっている。

可楽洞市場は運営上、日本の中央卸売市場と同じように、「農産物流通及び価格安定に関する法律（以下、「農安法」という）」により、ソウル市が開設者として、建物と施設を建設し、運営を卸売市場管理公社に委託している。市場

には青果物の指定卸売業者6法人（農協共販場を含む）が入っており、卸売業務を担当している。特に、ここで行われる競りは電子競りであり、日本に比べ電子競りにかけられる商品は9割以上と高い。電子競りと連動して、経理業務も大幅に電子化されている。野菜の競りは午後6時から、果物は深夜2時から始まる。競りは指で数字を表示する手示式とリモコン型の機械による機械入札機で行われている。

### 電子セリの様子（移動式電子セリ掲示機械とリモコン型入札機）



写真：筆者撮影。

## 3. 卸売業者2社の概況

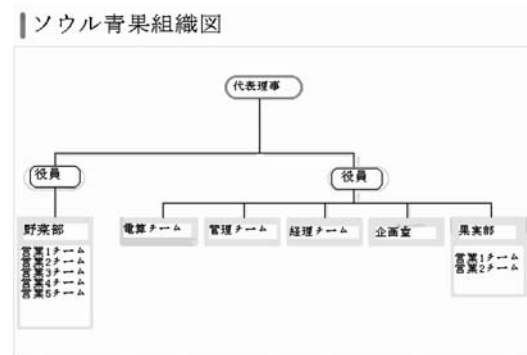
### （1）ソウル青果

ソウル青果は現在の可楽洞市場の青果物卸売業者6社のうちの1社である。1939年に創業し、1963年にソウル青果株式会社に商号変更した後、1985年に現在の可楽洞市場に移転した。資本金は75億ウォン（約6億円）で、昨年度の取扱高は約4,500億ウォンである。そのうち、野菜が2,000億ウォン、果物が2,500億ウォンである。親会社が利益を配当せず、留保してきたため、現在は自己資金の約300億ウォンで運営している。昨年の営業利益が約45億ウォン（税引き後約35億ウォン）あり、利益率は0.8%である。同青果物卸売業者の平均の0.6%より高く、収益率の良い会社であるといえる。近年、輸入農産物が増加傾向にあり、昨年は350億ウォンに達

しており、一部の野菜を除けば、そのほとんどは果物である。果物の取扱量は多い方から、バナナ、オレンジ、キュウイ、ぶどう、さくらんぼ、パイナップルの順となっている。

現在、担保金などの問題で、事実上、同社に所属する仲卸売業者が果物100名、野菜140名、白菜（専門）業者30名である。同社は1986年に業界で初めて業務の電算化を推進し、2001年には業界初のインターネットによる流通情報提供を開始した。2001年以降は、連続して韓国農林部の全国卸売法人評価とソウル市卸売法人評価において1位に選定されている。<sup>3</sup>

図1 ソウル青果組織図



出所：ソウル青果ホームページ。

ソウル青果は現在、職員が85名、うち3名が取締役である。果実部<sup>4</sup>と野菜部<sup>5</sup>の二大営業部門以外に電算チーム、管理チーム、経理チーム、企画室等の事務部門がある。（図1 ソウル青果組織図を参照）

### （2）韓国青果

韓国青果は可楽洞市場の青果物卸売業者6社のうち、野菜の取扱高が韓国国内で最も多い卸売業者である。2008年度の取扱高は約4,800億ウォンであり、今年度は5,000億ウォンに達すると予想されている。1979年1月に創立された後、1986年6月に可楽洞市場に移転し、営業を開始した。1993年にはソウル市の農水産物卸売市場

評価で最優秀法人に選定された。1995年4月に資本金を70億ウォンに増資し、1999年11月には応札機式の電子せりシステムを導入・運営を開始した。2001年のホームページおよび流通情報システム運営関連の Web Server の導入後、それによる流通情報システムを運営した。2004年以降、毎年韓国農林部の全国卸売市場評価の優秀法人に選定されている。

現在、韓国青果は会長以下、89名の職員を擁する。主な部署は経理電算本部、管理本部、果実部、野菜第1本部、野菜第2本部、野菜第3本部、秘書室となっている。

果実と野菜のせりの時間はソウル青果と同じ

く、以下の通りである。(表1を参照)

#### 4. 市場の取引、運営と管理についての質疑応答

Q1：ソウルの農産物卸売市場の概況及び韓国の農産物卸売市場について全体的な状況はどのようなになっているか？

A1：現在、ソウル市の人口をカバーする市場は可楽洞と江西と九里の三市場である。これをソウル都市圏に拡大すると、仁川、水原、安養、安山などが加わって8つになる。1985年に最初の公営卸売市場として設置された可楽洞市場に続いて、2000年以降に11カ所建設されている。

表1 品目別のセリ時間

(果物類)

時間	品目
02:00～ (夜中セリ)	ぶどう、もも、みかん、すもも
	いちご、メロン、マクワウリ、トマト、西瓜(段ボール)、甘柿
08:30～ (朝セリ)	りんご、なし、ゆず、渋柿
	西瓜
	輸入果実(オレンジ)
15:00	バナナ

(野菜類)

時間	品目
08:00	近郊野菜類(ふろしき包み、ひも)
済州産 08:00 その他 14:30	にんじん
19:00	近郊野菜類(段ボール) サンチュ、春菊、ほうれん草、チンゲン菜、チコリー、大ねぎなど
19:30	規格外出荷品(ふろしき包み、ひも) ほうれん草ほか葉菜や根菜など
20:00	とうもろこし
21:00	えごま葉
21:30	きのこ類、じゃがいも、ほうれん草、きゅうり、かぼちゃ、なすなど
22:00	レタス、にら
22:30	包装されたねぎ、大根、トウガラシ類、せり
23:00	白菜、玉ねぎ

出所：いずれも、ソウル青果ホームページ。

現在、韓国には32カ所の公営卸売市場がある。公営卸売市場における農産物の経由率は58%で、日本と異なり、いまだに上昇傾向にある。

Q2：卸売市場及び関係業者の経営状況はどうなっているか？

A2：韓国では赤字を出している卸売業者は2～3社程度と少なく、平均0.4%の営業利益が出ている。しかし、仲卸売業者の場合、約20%が赤字経営であり、その原因は規模の零細性であるとされている。年間取扱高が5億ウォン未満の業者は零細の業者とされているが、2006年の政府の統計を見ると、48%の業者がその対象となっている。話によると、日本では平均年間取扱高が7億円（約80億ウォン）の仲卸売業者でも規模が小さいといわれているが、韓国の仲卸売業者の規模が如何に小さいことかはわかると思う。

Q3：日本では多くの業者の取扱量は減少している。可楽洞市場の業者の取扱量は伸びていると聞いたが、その要因は何か？

A3：今後、韓国の卸売会社の取扱量、取扱高が減少するという予想もある。現在は市場の停滞或いは若干伸びているという状況である。ソウル青果の取扱状況を見ていると、市場全体の取扱高が減ると、もともと地方に流れるものがソウルの中央卸売市場に集中してしまうという二極化傾向があると思われる。それから、単価の面で見ると、単価と品質が比較的に高いものがソウルで売れるため、ソウルに集中するから取扱量が減っても、取扱高（金額）は減らず増えることという状況になっている。

Q4：卸売市場の手数料が7%まで取ってよいとなっているが、なぜソウル青果は4%しか取っていないのか？

A4：本来はソウル青果でも6%の手数料を取っていた。可楽洞市場における全国への波及効果を

を考え、政府（現：農林水産食品部）が指導をした結果、可楽洞市場の卸売業者が揃って2%の手数料を下げた。しかし、後に公正取引委員会で「談合」を指摘され、罰金を払って手数料を下げたという経緯があった。一方、自社の状況から見て、電子セリによって、少人数の職員（85人）でも効率的に業務を行えるようになった。おそらく同じような売上だと、日本の業者であれば3倍ぐらいの人員が必要だろう。それが手数料を高く設定せずとも運営できる主な要因であると考えている。また、手数料のうち、0.45%の出荷奨励金と0.6%の販売奨励金をそれぞれに生産者と仲卸売業者（全員ではないが）へ支払っている。

Q5：今後、可楽洞市場の青果物指定卸業者ににとって、何が課題となっているか？

A5：生産者から高く買って仲卸売業者に安く売るとするのが理想的であるが、なるべく仲卸売業者に購入してもらわないといけないので、卸売業者と仲卸は運命共同体である。したがって、課題となるのは仲卸売業者の育成である。なお、産地が卸売市場をどのようにとらえているのかも、重要になるといえる。その点から、産地への対応も重要な課題といえる。

## 5. 結びにかえて—今後の課題

すでに甲斐論〔2008〕<sup>6</sup>などの先行研究において、可楽洞卸売市場における流通主体と流通システムの特徴に①多様な流通主体の雑居システム、②肥大化する管理運営主体と二元的な管理運営、③業務内容が曖昧な仲買人とその閉鎖的取引関係、がある。なお、韓国の青果物流通システム整備の課題として、①閉鎖的流通システムの改革による流通の効率化と取引の公正性確保、②産地集出荷施設の整備と規格の標準化、があると指摘されている。

一方、韓国国内の新しい状況としては、現在、小売市場が量販店を中心に急速に再編され、農

産物の消費量が加工食品や外食を中心に变化したことにより、卸売市場の購買者は小型の小売店から大型量販店へと変化していった。このような大型量販店は、適時に一定の品質の商品を一定の価格で適量の供給を受けられるという、供給の安定性を何よりも重視している。卸売市場がせり入札中心の取引を維持する限り、こうした需要を満たすことはできないため、産地直取引が増加し卸売市場の取引能力が縮小するという懸念がある。しかし、卸売市場が縮小すると、小型の小売店は生鮮食料品の調達という面で困難な状況に陥ることになる。その結果として、量販店中心の小売市場の寡占化が促進され、産地は量販店に依存する恐れがある。こうしたことを考えると、卸売市場の役割はより重要になると考えられる。

特に、産地のほとんどがいまだに卸売市場を通した小規模の販売に依存しているため、公正かつ透明な価格決定を保証する卸売市場の機能は、非常に重要である。このような環境の変化に対応し、卸売市場は卸売市場法人と仲卸人の厳格な機能の区分をせず、統合しなければならないという主張がある。しかし、卸売市場が出資者と購買者の両方に公正な取引を保障するためには、双方の利益を代表する卸売市場法人と仲卸人の機能区分は維持されなければならない。大型量販店への供給の安定性を保証しないことは、機能区分に原因があるのではなく、卸売市場の主な取引方法がせり入札方式にとどまっていることが原因であり、取引の方法を必要に応じて柔軟に適用できるよう、制度を改編することが必要である。このような取引方法の改編と

実績が振るわない卸売市場法人と仲卸人を思い切って退出させるという制度を運営し、2つの卸売市場流通の主体が大規模化され、流通の効率性を高め、取引能力を向上させなければならない、という見解も韓国国内の研究者<sup>7</sup>から出されている。これに関する今後の動向は筆者の関心事でもあり、研究課題でもある。

#### 【注】

- 1 香月敏孝「書評『韓国農水産物卸売市場史』』『農林水産政策研究』2006年第11号 pp73
- 2 <http://www.livexseoul.com/info/view.htm?sec=3&seq=19>を参考。
- 3 資料：ソウル青果ホームページを参考。
- 4 果実部：19名（営業1チーム：16名、営業2チーム：2名、部長：1名）
- 5 野菜部：27名（以下人員に加え、部長ほか2名を含む）営業1チーム（キュウリ、かぼちゃ\*、なす、きのこ）：7名、営業2チーム（葉菜）：7名、営業3チーム（たまねぎ、大根、白菜類）：4名、営業4チーム（洋菜、じゃがいも）：4名、営業5チーム（トウガラシ、ピーマン）：3名\*…ここでのかぼちゃは日本のかぼちゃではなく、ズッキーニに近い野菜を指す。
- 6 甲斐論『食農資源の経済分析—情報の非対称性解消をめざして—』財団法人農林統計協会2008年、pp. 205—209
- 7 魏台錫「卸売市場の進むべき道と進んではならない道」（韓国語）『視線集中 GS&J 第84号』農産物流通研究シリーズ 6 2009.8.26 GS&J Institute